妖怪大戦争

2005(平成17)年9月23日鑑賞〈梅田ピカデリー〉 ★★★★

監督・脚本＝三池崇史／出演＝神木隆之介／宮迫博之／菅原文太／豊川悦司／栗山千明／高橋真唯／近藤正臣／岡村隆史／阿部サダヲ／竹中直人／忌野清志郎（松竹配給／2005年日本映画／124分）

……こういう映画（？）はあまり好きではない私だが、三池崇史監督作品だし、ベネチア国際映画祭で大好評だったため、興行ラスト近くになって半分義務感から鑑賞……？　とっくの昔に大人になった私は、既に「妖怪を楽しむ能力」を失ってしまっているのかも……？　だって、三池監督が気に入っているというエンディングのように、タダシ君だって大人になれば、もうあの「すねこすり」の姿が目にうつらなくなってくるのだから……？　それどころか、スケベおやじの目は、どうしても美しい川姫の太モモや鳥刺し妖女・アギの胸もとに……？　これでは、妖怪を楽しむ心は既に喪失し、スケベ心だけがなお残り、増殖中と言われても仕方なし……？　こりゃやっぱり、無心な子供連れの家族が楽しむ映画か……？

君の目に妖怪は見えるか……？

子供の頃、恐い話を聞いたり恐い小説を読んだ日、そして恐い映画を観た日は、夜中に１人でトイレに行くのが恐かったもの。廊下を歩いているときや、ほの暗いトイレの中に１人いると、風が吹いて木の枝がカサカサと鳴ったり、ガラス越しにその影が動いたりすると、思わず背筋がゾクッとした経験は誰にでもあるはず……？

そしてそのとき、僕やあなたの心の中や頭の中には、きっと○○妖怪や△△妖怪が存在していたはず……？　そしてその妖怪は、話で聞いたり、小説を読んだり、あるいは映画を観たりしたものをベースとして、各自がそれぞれの頭の中で

作り上げたもののはず……。しかしそこに、「１つ目」とか「ろくろ首」などの共通点があり、「雪女」や「天狗」そして「河童」などという共通の人材（？）が登場してくるのはなぜ……？　そして大人になった今、僕や君の目には、今なお妖怪の姿が見えるのだろうか……？

プロデュースチーム「怪」とは……？

『妖怪大戦争』というタイトルの映画は1968年12月にもあったが、同じ1968年３月の藤巻潤や高田美和、坪内ミキ子等の共演による大映映画『妖怪百物語』は、『座頭市』や『眠り狂四郎』シリーズの監督として有名な安田公義監督によって作られ、空前の妖怪ブームを巻き起こしたとのこと。

この時代（中学・高校時代）、私は日活映画をメインにして大映映画も東宝映画もたくさん観ていたが、その当時から妖怪ものはあまり好きでなかったため、残念ながらこの映画は観ていない。妖怪といえば何といっても水木しげるであり、その代表作は『ゲゲゲの鬼太郎』と思ってしまうが、妖怪ものの歴史はもっと古いうえ、幅も広い。

この映画製作のきっかけは、パンフレットによれば、妖怪専門誌『怪』に執筆する宮部みゆきが、あるとき、昔の『妖怪大戦争』の話をしたことが編集長や角川歴彦会長の耳に入り、その年の暮れの『怪』の忘年会で、水木しげる、荒俣宏、京極夏彦、宮部みゆきが、「映画『妖怪大戦争』を作ろう」と題した座談会を決行したことにあるらしい……。

この映画には日本古来の妖怪や悪霊たちが多数登場するが、たとえば豊川悦司扮する魔神・加藤保憲や大怨霊ヨモツモノという発想は荒俣宏の『帝都物語』の主人公そのもの……？

これだけのビッグネームがプロデュースチーム「怪」を組んだ場合の心配ゴト（？）は、それぞれのキャラが異なるし、それぞれ個性の強い人たちばかりだから、下手すると空中分解になりかねないという危険……？

しかしそれは、角川映画も今や大人となったし、三池監督だからこそまとまったもの……？

「モリゾー」「キッコロ」のメッセージと「機怪」のメッセージ

1970年に「人類の進歩と調和」をテーマとして開催された大阪万博は、高度経済成長期の日本を象徴したもの。これに対して2005年の名古屋万博「愛・地球博」は、「自然の叡知（えいち）Nature's Wisdom」をメインテーマとした。しかし同時に①宇宙、生命と情報（Nature's Matrix）、②人生の“わざ”と智恵（Art of Life）、③循環型社会（Development for ECO‐Communities）をサブテーマとしていたため、そこでは、ロボットなどますます進歩していくハイテクの未来とともに、ゴミ、環境、自然との共存などの描き方が大きく観客の興味を呼んだ。そして、このテーマはまさにあの「モリゾー」と「キッコロ」のキャラクターが端的に示しているもの……。

1997年にアメリカ『TIME』誌において、今後活躍が期待される映画監督としてジョン・ウー等と並び10位に選出された三池崇史が、今さらながら（？）『妖怪大戦争』という映画を監督するについては、何らかの強いメッセージ性を持っているはず……？　そう思っていたら、案の定、それは「機怪」という新造語とそのイメージの中に……？

この機怪とは、機械化と大量生産の進展の中で廃棄物とされた各種の機械と、アギが捕獲した妖怪を、「ヨモツモノ」が混ぜ合わせて作った怪物。そのため、この機怪はいろいろな廃棄機械の原形をとどめているものだが、この映画の中では悲しい大活躍を……？

こんなすばらしい自由な発想ができる三池監督は、やっぱり天才……？

鳥取が舞台となったのは……？

大天狗の山が必要不可欠なこの映画の舞台となったのは鳥取県。パンフレットによれば鳥取県が舞台とされたのは水木しげるの生まれ故郷だからということだが、同時にお隣の出雲大社信仰なども含めて日本ではやはり鳥取県が妖怪の舞台としてふさわしいと判断されたためでは……？

今年10歳となる主人公の稲生タダシ（神木隆之介）が、母親の陽子（南果歩）の故郷である鳥取県の境港（さかいみなと）で俊太郎じいちゃん（菅原文太）と

ともに生活しているのは、陽子が離婚したため。したがって、タダシの父親（津田寛治）と4歳年上の姉稲生タタル（成海璃子）は今も東京暮らし。都会育ちのタダシは田舎の学校に馴染めず、同級生のワンパク坊主たちからいつも「弱虫、弱虫！」といじめられていたが、ある日タダシは神社のお祭りで「麒麟送子」（きりんそうし）に選ばれた。「麒麟送子は世界の平和をもたらすという正義の味方で、大天狗が守る伝説の聖剣をとりに山の洞窟に行かなくてはならない」というじいちゃんの言葉を聞き、弱虫のタダシが勇気を出して1人大天狗の山に入ったところから、タダシと妖怪たちとのご対面が……？

ポイントは「すねこすり」……？

この映画の人間と妖怪を結びつけるポイントとなるのは「すねこすり」。こりゃ何のことか、映画を観ていない人にはわかるはずもないが、これは三池監督が創造した人工ネコか人工ネズミのようなかわいい動物（？）で、いわば後述の「機怪」の正反対に位置づけられるもの……？　なぜそんなネーミングになったのかは映画の中でじっくりと……。

大天狗の山の中でたくさんの妖怪たちと出会ったタダシは一匹のすねこすりとお友達となり、今や日常生活を共にしている状態。しかしタダシがこのすねこすりを頭の上に乗せて町中を歩いていても、誰もその姿に気付かない様子。それは一体なぜ……？

タダシのお友達となった妖怪たちは……？

人間にも、いい人間と悪い人間がいるように、そして神サマにも、いい神サマと悪い神サマがいるように（？）、妖怪にも、いい妖怪と悪い妖怪がいるもの。人間だけが特別な世界などと思うこと自体がナンセンスなのだ……？

俊太郎じいちゃんの声に導かれるように大天狗の山の中に入りこみ、さまざまなコワイ体験をしてきたタダシに対して、突如「合格！」と声をかけてきたのが、「麒麟送子」の先導役である近藤正臣扮する妖怪の猩猩。美しい川姫（高橋真唯）や河童の川太郎（阿部サダヲ）はその仲間。そしてまた、「小豆洗い」という岡村隆史扮するケッタイな妖怪もその仲間だが、彼はハイライトとなる加藤保憲

（豊川悦司）との最後の戦いにおいて、いかにも三池監督好みのケッタイながら重要な役割を果たすので、要注目。また日本の文化において、小豆（あずき）や小豆めし（赤飯）が果たす重要な役割の勉強も必要……？　これらがタダシのお友達となる善玉の妖怪たち……。

悪霊軍団は……？

これに対して、悪霊軍団のボスはもちろん加藤保憲。そして仲間を裏切って、この愛する加藤の一の子分になったのが鳥刺し妖女のアギ（栗山千明）。彼女の仕事は、その名前の通り、機怪にするために妖怪を捕獲して回ること。そしてこれを「ヨモツモノ工場」の中で混ぜ合わせて、新しい「機怪」を作り出すこと。

怒られることを覚悟であえて例えれば、これこそ先日の９・11総選挙における、W 先生や K 先生のようなもの……？

スケベおやじの目に見えるのは……？

とうの昔に大人となり、既に56歳となった私はいわば俊太郎じいちゃんと同じ世代……？　いやいや、そんなことはない！　私たち団塊世代はまだまだ俊太郎じいちゃんほどもうろくもしておらず、枯れてもおらず、何ごとにも意欲満々……？　そうでなければ団塊世代が一斉に定年退職を迎える2007年問題も乗りきることができず、日本国は大変なことに……？

しかして、団塊世代のおやじたちの元気の素はやっぱり色気……？　純粋だった少年時代のように、その目にはもはや妖怪の姿を見ることはできず、妖怪との戦争を楽しむこともできなくなったが、まだまだスケベ心だけは健在……？　そんなスケベおやじたちの目にもはっきりと見える妖怪は、美しい川姫の太もも……？　もっともこれは、映画の中に登場する妖怪雑誌「怪」の編集者である佐田（宮迫博之）と同じように、少年時代、溺れかけたところを美しい妖女に助けられたという夢体験にもとづく記憶……？

そしてもう１つ、スケベおやじの目に見えるのは、タランティーノ監督のあの『キル・ビル～ KILL BILL ～ Vol.1』（03年）で大活躍した栗山千明扮する鳥刺し妖女・アギの太もも、そして時折見せてくれる胸もと。河童や天狗の妖怪は見え

なくとも、またすねこすりのかわいい姿は見えなくなっても、これらの美女の太ももや胸もとが見えれば、まだまだ人生大丈夫……？

三池監督の好きなエンディングは……？

全国の妖怪たちを総動員した文字どおりの「妖怪大戦争」の終了によってこの映画が終わるのは当然だが、三池監督の工夫はその後の面白いエンディング……。「先の大戦」のとき10歳だった主人公のタダシ君は今は結婚している様子。もちろんあの俊太郎じいちゃんは既にお墓に眠っており、仏壇の上にはその元気なときの写真が……。

「行ってきます。今日は○○だから食事はいらないよ」と言い残して、自転車で職場へ出かけようとする大人になったタダシ（津田寛治）のそばには、昔と同じようにあの「すねこすり」がいるのだが、彼はそれに気付かない様子。それは一体なぜ……？

こういう演出が、この映画を大人も子供も楽しめる作品にしているうえ、ベネチア国際映画祭でも外国の観客から大いにうけた一因なのだろう……？

主題歌と挿入歌を素直に楽しめないのはなぜ……？

この映画の主題歌『愛を謳おう』と挿入歌『教えてジィジ』は忌野清志郎 with 井上陽水が歌っている曲。映画上映前のひとときもこの楽しげな雰囲気の曲が流れているので、すぐに覚えられそうなものだが、既に56歳となった私は、なぜか素直にこの歌のリズムや歌詞に溶け込んでいけないタイプ……？

井上陽水と並ぶ天才歌手と私が考えている吉田拓郎は、60歳となった今、あの「つま恋コンサート」を再度やろうと、私と同じ56歳のかぐや姫の南こうせつらに申し込んでいるとの新聞記事（2005（平成17）年９月25日付産経新聞朝刊「もう一度夢を見よう　２」）を読んだが、このように団塊世代の歌手たちは今でも元気そのもの……。

そして私は、あの時代のあの歌を、今の時代にみんなでもう１度というのは大好きだが、井上陽水の曲といえども、残念ながらこの主題歌や挿入歌のような歌を新たに歌い、覚えようという気にはどうしてもならない……。

井上陽水には、毎年日本テレビの『24時間テレビ――愛は地球を救う』のフィナーレでかつて谷村新司が加山雄三と２人で歌っていた『サライ』以上の大ヒットとなるような新曲を歌ってもらいたいものだが……。

あの武闘派も今や好々爺……？

この映画でかなりボケの入った老人俊太郎じいちゃんを演ずるのは菅原文太だが、彼が最も輝いていた映画は『仁義なき戦い』（73年）での武闘派ヤクザや『トラック野郎』シリーズ（75年～）での荒っぽいお兄さんの役。これらのイメージと比べるとこの映画での彼の役は何と好々爺になったもの、との感が強い。そりゃ、こんな老人役をうまく演ずるのも俳優の芸の広さを示すものだが、私としては、文太アニイには、ここまで枯れた役はやってもらいたくないというのが正直な気持。彼は1933年生まれだから、既に72歳となっているが、長寿社会日本ではまだまだ老け込むのは早い！

今度はこんな好々爺とはまったく違うイメージの、「武闘派」老人役を堂々と演じてもらいたいものだが……？

子供連れ家族争奪戦の勝敗は……？

９月10日に公開された『チャーリーとチョコレート工場』（05年）は大人気。私は公開翌日の９月11日（日）に行ったが、ほぼ満席となっていた。

他方、９月11日（日）に公開されたこの『妖怪大戦争』（05年）は、それなりに観客を集めているようだが、ラストの９月30日が近くなった今、さすがに息切れか……？

名古屋の「愛・地球博」は９月25日の最終日を控え、この23～25日の三連休はものすごい人が集まっている。それと同じように、９月23日（祝日）の今日は、朝の10時半頃も昼の１時頃も梅田ピカデリーの１階切符売り場は長蛇の列。

11時からの『夜霧よ今夜も有難う』（67年）を観た後、そのまま自転車を走らせて梅田ピカデリーで１時15分からの『妖怪大戦争』を観ようと思った私は、まず朝10時半に切符を買おうとしたのだが、その列の長さに恐れをなして中止。

そして『夜霧よ今夜も有難う』終了後、１時に再び梅田ピカデリー前に来ると、

ほぼ同じような列。しかし整理係をしているおじさんのマイクの声によると、この列のほとんどは『チャーリーとチョコレート工場』目当ての観客で、「○○時からの席は満席。△△時からの上映分は残り△△席のみ」ということ。そしてさらに聞いていると、比較的すいている『妖怪大戦争』と『シンデレラマン』(05年）のチケットは１階ではなく３階で売っているとのこと。そこで３階に上がるとすぐにオーケー……。

それにしても『チャーリーとチョコレート工場』のフィーバーぶりはものすごいもの。こりゃ久々に日本での大ヒット作となることまちがいなし……。この熱気を客観的に見れば、『妖怪大戦争』と『チャーリーとチョコレート工場』の子供連れ家族争奪戦は明らかに『チャーリーとチョコレート工場』の１本勝ち！

2005(平成17)年９月24日記

原点回帰の張藝謀監督に拍手

張藝謀（チャンイーモウ）監督、高倉健主演の『単騎、千里を走る。』が１月28日公開される。三国志に登場する有名な物語が『千里走単騎』。これは、劉備の妻子とともに曹操の手に落ちた義弟関羽が、再三の「引き止め策」に乗らず単騎で劉備の妻子を伴って帰っていくという感動の物語で、京劇でも再三上演される人気演目。

中国第五世代を代表する張藝謀監督の近時の映画には２つの系譜がある。『あの子を探して』（99）『初恋のきた道』（00）『至福のとき』（02）の純正中国型「感動」路線と、『ＨＥＲＯ（英雄）』（02）『ＬＯＶＥＲＳ』（04）のハリウッド型「ド派手」路線だ。前者が彼の本質だが、世界進出のため採用したのが後者で、興行的には大成功。しかし彼は本作で再び原点へと回帰した。

そのテーマは父と息子の確執と心の交流。舞台となる雲南省の麗江は世界文化遺産に指定された美しい町。私が04年11月に３連泊

したのはちょうどこの映画の製作時期だった。なぜ健さんが一人そんな町を訪れたのか？　それは、中国の仮面劇である京劇に魅かれていた重病の息子の想いを舞踏家の李さんに伝えるため。長年の確執から父親との対面を拒む息子を後に、麗江に赴いた健さんが体験する心の交流とは？

たどたどしい通訳や現地採用の素人俳優を絡めながら、それを丹念に描いていく張藝謀特有の手法はさすが。健さんは例によって寡黙（？）。表情と動作による「静かな熱演」だが、その感動は次第にクライマックスに。

ストーリーの平庸さが弱点だが、心の交流から生まれる感動と美しい風景はそれを補って余りあるもの。日中関係がギスギスしている今、三国志・京劇・麗江をキーワードとしてあなたの心を洗い流せば、新たな日中交流の輪が広がるのでは。張藝謀のド派手路線に対抗するべく（？）、真田広之らを起用した陳凱歌（チェンカイコー）監督の『プロミス』が２月11日公開されるが、ぜひこれと見比べてもらいたいものだ。

（弁護士　坂和章平）

映画

産経新聞　2006（平成18）年１月27日（本書312頁参照）